

第1016回オーチャード定期演奏会

5月11日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第1017回サントリー定期シリーズ

5月13日(火) 19:00開演 サントリーホール

第170回東京オペラシティ定期シリーズ

5月19日(月) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

5
/11

5
/13

5
/19

指揮：ミハイル・プレトニョフ

ピアノ：松田華音*

コンサートマスター：依田真直

ショパン(プレトニョフ編)：

ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 Op. 11* (約42分)

- I. アレグロ・マエストーソ
- II. ロマンツェ：ラルゲット
- III. ロンド：ヴィヴァーチェ

－ 休憩 (約15分) －

チャイコフスキー：

バレエ『眠れる森の美女』より (約52分)

(プレトニョフによる特別編集版)

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 1. 序奏 | 7. パ・ダクシオンより コーダ(第2幕) |
| 2. 行進曲(プロローグ) | 8. 間奏曲(第2幕) |
| 3. 踊りの情景(プロローグ) | 9. 交響的間奏曲と情景(第2幕) |
| 4. 終曲(プロローグ、第1幕) | 10. 終曲(第2幕) |
| 5. 情景(第1幕) | 11. パ・ダクシオンよりアダージョ(第1幕) |
| 6. ワルツ(第1幕) | |

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団(5/13)

協力：Bunkamura(5/11)



♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。

♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。

♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。終演後のカーテンコールも、マナーを守ってお楽しみください。

出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

ミハイル・プレトニョフ

Mikhail Pletnev, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 特別客演指揮者

一言では説明できない多才な芸術家。ピアニスト、指揮者、作曲家として魔法のような才能で、世界中の聴衆を魅了している。1957年ロシアのアルハンゲリスク生まれ。1978年、21歳でチャイコフスキー国際コンクールのゴールド・メダルおよび第1位を受賞し、国際的な脚光を浴びる。驚くべき技巧、深い知性に裏づけられた演奏、完璧にコントロールされた美しい音色で、カリスマ的人気を誇る現代最高のピアニストの一人として活躍。

ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団ほか数々のオーケストラを指揮。ボリショイ・オペラでの『スペードの女王』指揮で大成功を収めているほか、コンサート形式のオペラ指揮も行っている。

1990年ロシア内外の個人、団体より資金を得、ロシア史上初めて国家から独立したオーケストラとしてロシア・ナショナル管弦楽団(RNO)を設立。指揮者として東京フィルハーモニー交響楽団には2003年7月に初めて客演、以来定期的に招かれ、2015年4月より特別客演指揮者に就任。2022年には新たなオーケストラ、ラフマニノフ国際管弦楽団(RIO)を創設。



©Ayako Yamamoto

ピアノ

松田華音

Kanon Matsuda, piano

6歳よりモスクワで学ぶ。ロシア最高峰の名門、グネーシン記念中等（高等）学校で学び、スクリャービン記念博物館より2011年度「スクリャービン奨学生」に選ばれ、外国人初のも優秀生徒賞を受賞し首席で卒業。モスクワ音楽院に日本人初となるロシア政府特別奨学生として入学、2019年6月首席で卒業。2021年モスクワ音楽院大学院修了。

これまでにプレトニョフ、ゲルギエフ、パッティストーニ、インキネン、秋山和慶、井上道義、円光寺雅彦、尾高忠明、小林研一郎、高関健、飯森範親各氏等の指揮の下、ロシア・ナショナル管弦楽団、マリンスキー歌劇場管弦楽団、プラハ交響楽団、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団等と共演。最近では室内楽にも取り組むなど、活動の場を拓けている。

ドイツ・グラモフォンより2枚のアルバムをリリース。2018年かがわ21世紀大賞受賞。

公式HP：<https://www.japanarts.co.jp/artist/kanonmatsuda/>

楽曲紹介

解説＝山本明尚

ピアニスト、指揮者、また作曲家としてもたぐいまれなる才覚を発揮し、世界中の聴衆を虜にし続けているプレトニョフ。チャイコフスキー・コンクール優勝から始まり、世界を股にかけて活躍するヴィルトゥオーゾとしての輝かしい経歴はもはや言うまでもない。知性的な分析力と豊かな感情表現を兼ね備えた彼のピアノ演奏は、特にロシア音楽において独自の深い解釈で聴く者を魅了してきた。自身が1990年に立ち上げ、(非常に遺憾な経緯をもって)2022年9月に離職するまで芸術監督を務めたロシア・ナショナル管弦楽団を牽引し、あまり演奏されていない曲を含めて様々な作品に新たな光を当ててきた。さらに作曲家としては、主に編曲の分野で卓越した才能を発揮し、ピアノ曲から管弦楽曲まで幅広いレパートリーを自在に扱い、楽器や和声の扱いに長けた深い音楽性を示してきた。モスクワ音楽院(当時)の名伯楽ヴォスクレセンスキーに学び、プレトニョフが独奏者にと指名する名若手、松田華音との共演で、今日は彼の音楽的魅力を存分に楽しめるひとときとなるだろう。

ショパン(プレトニョフ編) ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 Op. 11

第1番のピアノ協奏曲は1830年、ショパンが19歳の時に作曲された(1829年の第2番の方が先の完成だが、番号付けは楽譜の出版順による)。ポーランドを離れる直前に開催された1830年10月12日の告別演奏会でショパン自身の独奏で初演され、満員の聴衆の大喝采を浴びたという。その後ショパンは音楽の都パリへと向かい、二度と祖国へと戻らなかったわけだから、彼がポーランドで創造した最後の曲の一つということになるだろう。

2曲のピアノ協奏曲はショパンの作品の中でも人気だが、興味深いことに、この曲の管弦楽パートにはショパン以外の人間の手が加えられているようだ。ショパンの「作曲当初の意志」を尊重する形で楽譜を出版しているショパン・ナショナル・エディションの編集部は、当時旅行や演奏で多忙を極めたショパンが、ア

シスタントに管弦楽パートの作曲を助力してもらったのではないかと推測している。しかしこの「原曲」の管弦楽パートは、しばしば優れた音楽家たちの不満を呼んできた。「ショパンはオーケストラが不得手なのではないか」——こうした神話が生まれ、それを「改良」しようと編曲に取り組んだ音楽家が何人も現れたのである（実際は、管弦楽を手がけたアシスタントの力不足だと思われるのだが）。

ブレトニョフの編曲は、音色を増強するだけでなく、所々で原曲から楽器を引いたり、ピアノが受け持っていた旋律を管弦楽に担わせたりすることで、メリハリのついた新鮮な色彩感と透明感を協奏曲にもたらしめている。聴き慣れた協奏曲に、新しい魅力を与えてくれる編曲だ。

第1楽章(アレグロ・マエストーゾ)は、オーケストラが二つの主題を提示した後、それらを反復する形で華麗なテクニックをピアノが披露する。堂々とした第一主題と朗々と明るい第二主題は、どちらもショパンの若い時期から見られた旋律法の卓越ぶりを示している。

第2楽章(ロマンツェ：ラルゲット)は、副題にもあるとおり美しくロマンチックな「歌」による楽章。弦楽合奏による短い序奏と、牧歌的なホルンに導かれて独奏ピアノがどこか憂いをはらんだ長調の主題を奏する。

切れ目なく続く**第3楽章(ロンド：ヴィヴァーチェ)**は軽妙だが華やかなフィナーレ。主題はショパンの祖国ポーランドの民俗舞踊クラコヴィアクの様式に基づいている。いわゆる「裏拍」に重心が乗る、澁刺とした跳ねるようなリズムが特徴的だ。副次的な主題の旋律も、民謡的な要素を多分に含んでおり、ショパンがポーランドで育んだものを惜しみなく注ぎ込んでいるかのようだ。

【作曲年代】1830年 【初演】1830年10月11日、ワルシャワにて作曲者自身の独奏による
【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

チャイコフスキー バレエ『眠れる森の美女』より (プレトニョフによる特別編集版)

『白鳥の湖』、『くるみ割り人形』と並んでチャイコフスキーの三大バレエの第2作に数えられる、彼の晩年の傑作『眠れる森の美女』は、首都ペテルブルクの帝室マリインスキー劇場の依頼によって作曲された。ロシア皇帝の権威と栄華を内外にアピールするべく、絢爛で大規模な、かつてパリで盛んだった宮廷バレエのような作品を作る、それが彼らの願いだった。チャイコフスキーは見事に依頼に応え、クラシック・バレエの集大成とも言える絢爛かつ均整のとれた音楽、しかも彼一流の色彩感を備えた音楽を創り上げてみせた。

演奏会ではしばしば大規模なバレエ作品から抜粋した「組曲」が演奏されることが多く、三大バレエそれぞれにもそうした組曲が存在する。しかし『眠れる森の美女』組曲について言えば、チャイコフスキーは組曲を編纂しておらず、後世の人間による選曲に出版社が「作品66a」という番号をつけたものとなっている。この種の組曲作品は、元々の舞台作品の流れを断ち切り、音楽そのものの流れに任せることに重きを置いて楽曲が配置されることが多い。いっぽう今回演奏されるプレトニョフの特別編集版は、終曲に第1幕の楽曲が用いられているのを例外として、全体的な物語——つまり、結婚式の祝祭という大団円「以後」の華やかな第3幕を除いた、ドラマが駆動するプロローグから第2幕——に沿って音楽を配置しており、元々のバレエの流れに重きを置いている。

「序奏」は驚きをもって始まるが、次第に落ち着くと第1幕中盤、妖精が淑やかに踊る穏やかなシーンの音楽へと移行する。切れ目なく続く「行進曲」は、勇壮な軍楽調のリズムと、弦楽器を基調とする華麗な宮廷のムードが入り交じる。「踊りの情景」は3つの踊りが組み合わさった音楽。優雅、華美、軽快が一つの曲の中で次々と表情を変えて表現される。「終曲」はプロローグと第1幕のものが組み合わされている。クラリネット独奏による朗唱的な旋律に続いて序曲冒頭のモチーフが導入され、妖精の踊りのモチーフも繰り返されるが、ここでは華やかに変容している。

舞台は第1幕、オーロラ姫の誕生日の祝賀へと移る。軽やかで優美な「情景」と、続く「ワルツ」では姫の純真さと喜びが表現されている。

第2幕より「パ・ダクシオンよりコーダ」は急速なフレーズがどんどんと掛け合いながら進む緊迫感のある音楽。「間奏曲」は、ほとんどヴァイオリン協奏曲と言っていいほど、独奏ヴァイオリンが音楽を支える。「交響的間奏曲と情景」では、呪いによって眠りに落ちたオーロラ姫と彼女を取り巻く森の神秘的な雰囲気表現する序奏の後、勇壮な雰囲気の中王子が現れる。楽曲結尾のクライマックスでオーロラ姫に口づけすると、音楽はすぐさま「終曲」へと移り、物語は高揚感のなかで大団円へと向かう。呪いは解け、姫をはじめとする城の全員が目覚まし、若い王子と姫は結ばれる。

今回演奏される『眠れる森の美女』の掉尾を飾るのは第1幕「パ・ダクシオンよりアダージョ」。ハープのソロが印象的な序奏は『くるみ割り人形』の「花のワルツ」を思い起こさせる。主部の音楽は甘美で夢見るような旋律が情感豊かに歌い上げられる。

【作曲年代】1889年 【バレエ初演】1890年1月15日、サンクトペテルブルクにてリッカルド・ドリゴの指揮による

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、コルネット2、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール）、ハープ、弦楽5部

やまもと・あきひさ／音楽学者。専門は19世紀後半～20世紀初頭のロシア芸術音楽。東京大学特任研究員（日本学術振興会特別研究員・PD）、東京藝術大学音楽学部楽理科教育研究助手、東京音楽大学・立教大学非常勤講師。ロシア国立芸術学研究所音楽史専攻Ph.D.課程（モスクワ）・東京藝術大学大学院博士課程をそれぞれ修了。日本音楽学会、日本音楽教育学会、日本ロシア文学会、ロシア・フォークロアの会、日本アルバン・ベルク協会各会員。